

## 第 104 回日本精神神経学会総会

## シンポジウム

## 産業保健における精神科医の役割——外部と内部の連携——

コーディネーター 黒木 宣夫

某職能団体の平成 18 年度年次報告書によると、精神・行動の障害による長期病休者（1 ヶ月以上の診断書を提出して休業に至った者）は毎年、増加傾向にあり、全体の職員数が減少（13 年度 4862165 人、18 年度 299871 人）したにもかかわらず同年度の長期休職者は 3846 人で、全休職者の 63.0% は精神及び行動の障害で休業したと報告されている。他団体・企業においても同様の傾向にあると言われており、長期休業者が増えると当然、長期休業をする際に主治医の診断書を必要とし、復職する際には再度、職場復帰可能との診断書が必要とされ、産業医や企業内の嘱託精神科医の判断を参考に職場調整することが企業に求められる。その際に企業外主治医と産業医、あるいは企業内診療所に勤務する主治医と産業医との関係は、相反する立場に立たされることもあり、就業者の職場復帰に際しては、意見の相違や食い違いがみられることがある。また、職場復帰後の就業制限や出張制限に関しても同様である。企業内主治医は主治医であるがゆえに企業との狭間で微妙な立場に立たされることもあるが、企業内主治医、企業外主治医、企業内精神科医、産業医の関係、特に企業内診療の利点と問題点を整理し、産業保健のあり方を模索・検討するために本シンポジウムを開催した。

荒井稔先生は、これまで約 20 年間で精神科産業医として診療所兼健康管理センターで、約

2000 名の就労者の診断治療、休職・復職の判断、事例の管理者に対する指導、職員研修、経営者への精神健康についての意見の具申などの活動を行った経験から「企業所内診療所における産業精神医学的活動の利点と問題点」を報告、企業内診療所の利点として 1) 事例や職場のもつ問題点について関与しながらの観察 (Sullivan) ができたこと、2) 職務を行う際の困難に配慮した薬物投与、精神療法が行えたこと、3) 心身の疾患発症の高危険群に直接面接を行うことで、障害の発症・増悪を早期発見・治療が可能、4) 本人と上司等の集団精神療法の機会を得られやすいこと、等をあげられ、問題点としては、1) 治療者としての中立性を維持するのに困難が伴う場合があること、2) 治療者と判断者という二つの役割を統合することに困難がある場合があること、3) 職場が医学に依存的になりすぎることをあげられた。島悟先生は、10 年近く事業場に EAP サービスを提供しているが、一次予防から三次予防まで多様な支援を行ってきた立場から「EAP の立場から」を報告、うつ病等の精神障害の事例への早期対応や自殺リスクの高い事例への危機介入、さらに復職事例における事業場との連携において、当事者（および家族）の同意を得ながら事業場内産業保健スタッフと情報の交換・共有や役割分担等を行いながら、職場内外の適切な連携が行われれば、当事者にとっても事業場にとっても望ましい結果

が得られると強調された。廣尚典先生は、長年、産業医業務を實踐されてきた立場から「産業精神保健における精神科医と産業医の連携」を報告、職場のメンタルヘルス対策の推進において、精神科医には、当座の本人、家族からの要求に応えるだけでなく、健康上の配慮から就業制限等の判断に関しては、職業生活をも見据えた対応が必要であり、企業側も精神科医に諸判断を求める際には、職場からの情報伝達や要請はできるだけ具体的であり、主治医である精神科医と産業医の連携は不可欠であることを強調された。松原良次先生は、精神科主治医の立場から「産業保健における精神科医の役割——外部と内部の連携——」を報告、職場復帰などの判断根拠のひとつとなる職場へ提出する診断書の診断名について、特定医療法人社団慶愛会札幌花園病院における調査結果を報告された。精神科医は、労働者個人の治療が目的であり、その個人の立場を最大限に尊重する主治医の

立場と、企業という組織と労働者という個人の中立性を維持し、安全配慮義務に基づいて判断する産業医との立場の相違は当然であるが、この異なる立場をよく理解した上での十分な情報交換が必要であることを強調された。

4人のシンポジストの先生方の講演後、フロアからも多くの質問が出された。企業内外での主治医や産業医としての関わりに関しては、それぞれ利点や欠点があることは論をまたないが、互いの立場からの情報収集の根拠には限界があり、さまざまな角度からの情報を得た上で中立・公正に対応することが、結果的には企業、患者双方に必要なことと思われた。さらに2008年4月の労働契約法5条に安全配慮義務が加えられ、事業所ごとに労働者個人に配慮しながらメンタルヘルスケアを實踐することが、求められる時代になったが、このような社会的背景のなかで本シンポジウムは有意義なものとなった。